

# 蠅

海野十三

青空文庫



こはるこはるびよりびより  
小春日和の睡ねむさつたらない。白い壁をめぐらした四角い部屋の中に机を持ちこんで、ボンヤリと肘ひじをついている。もう二時間あまりもこうやっている。身体がジクジクと発はっ酵こうしてきそうだ。

白い天井には、黒い蠅はえが停とっている。停とっているがすこしも動かない。生きているのか、死んでいるのか、それとも木ミイ乃伊イになっっているのか。

それにしても、蠅はえが沢山いることよ。おお、みんなで七匹もいる。この冬の最中に、この清潔な部屋に、天井から七匹も蠅はえがぶら下ぶっていてそれでよいのであろうか。

そう思おもった途端とたんに、耳の傍かたでなんだか微かすかな声こゑがした。ナニナ

二。蠅が何かを咄<sup>はな</sup>して聴かせるつて。

ではチヨイト待ちたまえ。いま原稿用紙とペンを持つてくるから……。

オヤ。どうしたというのだろう。持って来た覚えもないのに、原稿用紙とペンが、目の前に載っているぞ。不思議なこともあればあるものだ。——

第一話 タンガニカの蠅

「あのウ、先生。——」

と背後うしろで声こゑがした。

クリシマ博士は、顕微鏡めがねから静かに眼を離した。そのついでに、深い息をついて、椅子の中に腰を埋うずめたまま、背のびをした。

「あのウ、先生」

「む。——」

「あの卵らんは、どこかにお仕舞いでしょうか」

「卵たまごというと……」

「先日、あちらからお持ちかえりになりました、アノ駝鳥だちようの卵  
ほどある卵たまごでございますが……」

「ああ、あれか」と博士は始めて背後へふりかえった。そこには

白い実験衣をつけた若い理学士が立っていた。

「あれは——、あれは恒温室こうおんしつへ仕舞って置いたぞオ」

「あ、恒温室……。ありがとうございました。お邪魔をしまして  
……」

「どうするのか」

「はい。午後から、いよいよ手をつけてみようと思ひまして」

「ああ、そうか、フンフン」

博士はたいへん満足そうに肯うなずいた。助手の理学士は、恭うやうやしく礼

をすると、登あしおと音もたてずに出ていった。彼はゴム靴を履いてい

たから……。

そこでクリシマ博士は、再び顕微鏡めがねの方に向いた。そしてプレ

パラートをすこし横へにじ躪らせると、また接せつ眼がんレンズに一眼を当てた。

「あのウ、先生」

「む。——」

またやって来たな、どうしたのだろうか、博士は背後をふりかえつて、助手の顔を見た。

「あのウ、恒温室の温度保持のことでございますが、唯今せつし摂氏五十五度になって居りますが、先生がスイッチをお入れになったのでございますようか」

「五十五度だね。……それでよろしい、あのタンガニカ地方の砂地の温度が、ちょうどそのくらいなのだ。持って来た動物資料は、

その温度に保って置かねば保存に適當でない」

「さよですか。しかし恒温室内からピシピシという音が聞えて参りますので、五十五度はあの恒温室の温度としては、すこし無理過ぎはしまいかと思いますが……」

「なーに、そりや大丈夫だ。あれは七十度まで騰あげていい設計になつているのだからネ」

「はア、さよですか。では……」と助手はペコンと頭を下げて、廻れ右をした。

博士は、折角せつかくの気分を、助手のためにすっかり壊こわされてしまったのを感じた。といって別にそれが不快というのではない。ただ気分の断層によつて、やや疲れを覚えて来たばかりだった。



博士は、白い実験衣のポケットを探ると、プライヤーのパイプを出した。パイプには、まだミツキスチエアが半分以上も残っていた。燐寸<sup>マツチ</sup>を擦って火を点けると、スパSPAと性急に吸いつけてから、背中をグツタリと椅子に凭れ<sup>もた</sup>かけ、あとはプカリプカリと紫の煙を空間に噴<sup>ふ</sup>いた。

（探険隊の一行が、タンガニカを横断したときは……）と博士は、またしても学者としての楽しい憶い出をうかべていた。

タンガニカで、博士は奇妙な一つの卵を見付けたのだった。助手がさきほども、駝<sup>だちよう</sup>鳥のような卵といったが、全くそれくらいもあろう。色は淡<sup>たんこうしよく</sup>黄色で、ところどころに灰<sup>かいはくしよく</sup>白色の斑<sup>はんで</sup>点<sup>ん</sup>があった。それは何の卵であるか、ちよつと判りかねた。な

にしる、この地方は、前世紀の動物が棲すんでいるとも評判のところだったので、ひよつとすると、案外掘りだしものかも知れないと思つた。鳥類にしても、余程よほど大きいものである。それではる博士の実験室まで持つてかえつたというわけだつた。そして他の動物資料と一緒に、タンガニカの砂地と同じ温度を保たもたせた恒温室の中に二十四時間入れて置いたというわけである。

ガン、ガラガラツ。

ガラガラガラツ。パシーン。

博士はパイプを床ゆかにとり落した。それほど物凄すごい、ただならぬ音響がした。音の方角は、どうやら恒温室だつた。

「さては恒温室が、熱のために爆発らしいぞ」

博士は驚いて戸口の方へ歩を搬ほこんだ。扉に手をかけようとすると扉ドアの方でひとりパツと開いた。——その向こうには、助手の理学士の土色つちいろの顔があつた。しかも白い実験衣の肩先がひどく破れて、真赤な血潮が見る見る大きく拡がつていった。

「ど、どうしたのだッ」

「せ、せんせい、あ、あれを御覧なさい」

ブルブルと顫ふるう助手の指先は、表おもてどおり通とおに面した窓を指した。

博士は身を翻して、窓まじぎわ際に駈かけつけた。そして硝子ガラスを通して、往來を見た。

大勢の人がワイワイ云いながら、しきりに上の方を指している。どうやら、向い側のビルディングの上らしい。

とたんに飛行機が墜落するときのような物凄い音響がしたかと思つと、イキナリ目の前に、自動車の二倍もあるような真黒なものが降りてきた。よく見ると、それには盪たらいのような眼玉が二つ、クルクルと動いていた。畳一枚ぐらゐもあるような翅はねがプルンプルンと顫せんどう動していた。物凄い怪物だツ！

「先生。恒温室の壁を破つて、あいつが飛び出したんです」

「君は見たのか」

「はい、見ました。あのお持ちかえりになつた卵を取りにゆこうとして、見てしまいました。しかし先生、あの卵は二つに割れて、中は空からでした」

「なに、卵が空……」博士はカツと両りょう眼がんを開くと、怪物を見

直した。そして気が変になったように喚わめきたてた、「うん、見ろ。あれは蠅だ。タンガニカには身長が二メートルもある蠅が棲すんでいたという記録があるが、あの卵はその蠅の卵だったんだ。恒温室で孵化ふかして、それで先刻さつきからピシピシと激しい音響をたてていたんだ。ああ、タンガニカの蠅！」

博士は身に迫る危険も忘れ、呆ぼう然ぜんと窓の下に立ちつくした。  
ああ、恐るべき怪物！

このキング・フライは、後に十五万ヴォルトの送電線に触ふれて死ぬまで、さんざんに暴れまわった。

第二話 極左の蠅きよくさ

その頃、不思議な病気が流行はやった。

一日に五六十人の市民が、パタリパタリと死んだ。第十八世に一度姿を現わしたという「赤き死の仮面」が再び姿をかえて入りこんだのではないかと、都みやこ大路は上を下への大騒動だった。

「きようはこれで……六十三人目かな」

死屍室ししつから出て来た伝染病科長は、廊下に据付けすえつの桃色の昇しょう

汞こうすい水すいの入った手洗の中に両手を漬つけながら独り言を云った。

そこへ細菌科長が通りかかった。

「おい、どうだ。ワクチンは出来たか」

「おお」と細菌科長は苦笑にがわらいをしながら足を停めた。「駄目、

駄目、ワクチンどころか、まだ培養ばいようできやせん」

「困ったな。今日は息を引取ったのが、これで六十……」

と云おうとしたところへ、肥ふとつちよの看護婦がアタフタ駈かけてきた。

「先生、すぐ第二十九号室へお願いします。脈が急に不整ふととのえになりまして……」

「よオし。すぐ行く」といって再び細菌科長の方を振りかえり、

「今日はレコード破りだぞ。こんどが六十四人目だ」

「……」

二人は反対の方角に、急ぎ足で立ち去った。

入れかわりに、廊下をパタパタ草履ぞうりを鳴らしながら、警視庁のおおえやま大江山捜査課長と帆村探偵ほむらとが、肩を並べながら歩いて来た。

「……だから、こいつはどうしても犯罪だと思つたのですよ、課長さん」

「そういう考えも、悪いとは云わない。しかし考えすぎとりやせんかナ」

「それは先刻さつきから何度も云つていますとおり、私の自信から来ているのです。なにしろ、病人の出た場所を順序だてて調べてもらんなさい。それが普通の伝染病か、そうでないかということが、すぐ解わかりますよ。普通の伝染病なら、あんな風になら、一つ町内に出



ると、あとはもう出ないということはありません」

「しかし伝染地区が拡がってゆくところは、伝染病の特性がよく出ていると思う」

「伝染病であることは勿論もちろんですが、ただ普通じやないというところが面白いのですよ」

二人の論争が、そこでハタと停つた。彼の歩調も緩ゆるんだ。丁ちよう度ど二人が目的の部屋の前に来たからである。黒い漆うるしをぬつた札の表には、白墨はくぼくで「病理室」と書いてあつた。

ノックをして、二人は部屋の扉ドアを押した。

「やあ——」

と暗い室内から声をかけたのは、花山医学士だった。彼は待ち

かねたという面持おももちで、二人を大きな卓子テーブルの方へ案内した。そこには硝子蓋ガラスぶたのついた重ね箱かさばこが積んであった。

「このとおりです。みんな調べてみました」

硝子箱の中には、沢山の白い短冊たんざく型の紙がピンで刺してあった。そして大部分は独逸文字ドイツもじで書き埋めうづられてあったが、一部の余白あましろみたいなどころには、アラビア・ゴムで小さい真黒な昆虫が附着つしていた。どの短冊もそうであつた。

それは蠅以外の何物でもなかつた。

「結果は如何でした」

と帆村探偵が、頬を染めながら訊きいた。

「大体を申しますと、この蠅の多くは、家蠅いえばえではなくて、刺さば

蠅えというやつです。人間を刺す力を備えているたった一種の蠅です。普通は牛小屋や馬小屋にいますが、こいつはそれとはすこし違うところを発見しました。つまり、この蠅は、自然に発生したのではなくて、飼育されたものから孵かえつたのだということが出来ます」

「すると、人の手によつて孵されたものだといふのですね」と帆村が訊ききかえました。

「そういうところです。なぜそれが断だんげん言げんできるかといふと、この蠅どもには、普通の蠅に見受けるような黴ばいきん菌きんを持っていない。極めて黴菌の種類が少い。大たい抵ていなら十四五種は持っているべきを、たった一種しか持っていない。これは大いに不思議です。深し

窓んそうに育つた蠅だといってよろしい」

「深窓に育つた蠅か？ あツはツはツはツ」と捜査課長が謹きんげん厳げんな顔を崩して笑い出した。

「その一種の黴ばいきん菌とは、一体どんなものですか」と帆村は笑わない。

「それが——それがどうも、珍らしい菌ばかりでしてナ」

「珍らしい黴菌ですって」

「そうです。似ているものといえ、まずマラリア菌ですかね。とにかく、まだ日本で発見されたことがない」

「マラリアに似ているといえ、おお、あいつだ」と帆村はサツと蒼あおざめた。「いま大流行の奇病の病原菌もマラリアに似ている

というじゃないですか。最初はマラリアだと思ったので、マラリアの手当をして今に癒なおると予定をつけていたが、どうしてどうして癒るどころか、癒らにやならぬ日には、その病人の息の根が止まっていた。では、あの蠅の持っている黴菌ばいきんというのが、あの奇病を起させたのじゃないですか」

医学士は黙っていた。その答えは彼の領分りょうぶんではなかったから。

大江山捜査課長も黙っていた。目の前に現われた事実が、帆村の予言したところと、あまりによく一致して来たので。

「さあ大江山さん」と帆村は捜査課長を促うながした。「これから、あの蠅を採取した地区を探してみるのです。もつと大胆な推定を下

すならば、犯人は沢山の蠅を飼育し、その一匹一匹に病原菌を持たせて、市民に移していったのです。犯人は、あの奇病の流行した地区の幾何学的きかがくてき中心附近に必ず住んでいるに違いありません。さあ行きましよう。行って、その間接の殺人魔を捉とらえるのです」

二人は病理学研究室を飛び出すと、すぐに自動車を拾った。いわゆる奇病発生地区の幾何学的中心地が、帆村の手で苦もなく探し出された。

二人が、チンドン屋の寅太郎とらたろうという、いつも手甲脚絆てこうきやはんに大石良雄おいしよおを気取って歩く男を捉えたのは、それから間もなくの出来ごとだった。その寅太郎の遂ついに自白したところによると、彼まきこそ正しくその犯人だった。極左の一人として残る医学士の彼が、

蠅に黴菌を背負わして、この恐ろしい犯行を続けていたことが明かになった。ねじけた彼にとつて、市民をやっつけることは、またとない悦びよろこだったのだ。彼が丹精たんせいして飼育したその毒蠅は、チンドンと鳴らして歩くその太鼓たいこの中にウジャウジャ発見された。彼が右手にもった桴ばちで太鼓の皮をドーンと叩くと、胴の上に設けられてある小さい孔あなから、蠅が一匹ずつ、外へ飛び出す仕掛けになっていた。

彼の検挙によつて、例の奇病が跡を絶ったのは云うまでもない。

### 第三話 動かぬ蠅

好きもの者の目賀野千吉は、或る秘密の映画観賞会員の一人だった。一体そうした秘密映画というものは、一と通りの仕草しぐさを撮ってしまうと、あとは千辺せんぺん一律いちりつで、一向いっこう新鮮な面白味をもたらずものではない。そこで会主かいしゅは、会員の減少をおそれて一つの計画を樹たてた。それは会員たちから、いろいろの注文を聞き、それに従って、映画の新鮮な味を失うまいと心懸がけた。果してそれは大成功だった。会主の狭い頭脳から出るものよりも、同好者の天才的頭脳を沢山に借りあつめることが、いかに素晴らしい映画を後から後へと作りあげたか、云うまでもない。目賀野千吉は、



その方面での、第一功労者にあげねばならない人物だった。

会は大変儲もうかった。会は彼の功労を非常に多たとし、遂ついに千五百円を投げ出して、新邸宅を建てて彼に贈った。

「ほほう。あんな方面の労務出資しゅつしが、こんなに明るい新築の邸て宅いたくになるなんて、世の中は面白いものだナ」

彼は満足そうに独ひとりごと言ことを云つて、白い壁にめぐらされた洋風

間に持ちこんだベッドの上に長々と伸びた。真白な天てんじょう井いだつ

た。新しいというのは、まことに気持がいいものだ。蠅はが一匹止まっている。それさえ何となく、ホーム・スウィート・ホームで、

明朗さを与えるもののように思われた。蠅はのやつも、恐らく伸びと、この麗うらちかな部屋さかさまに逆さかさま様さまになって睡ねむっていることである

う。

彼はうらかな生活をしみじみと味わって、幸福感に浸<sup>ひた</sup>った。いままでの変態<sup>へんたい</sup>的な気持がだんだん取れてくるように感じた。もうあの夜の映画観賞会には、なるべく出ないようにしようと考えた。明るい生活がだんだんと、彼の心を正しい道にひき戻していったのだった。

しかしそれと共に、彼はなんだか非常に頼<sup>たよ</sup>りなさを感じていった。淋<sup>さび</sup>しさというものかも知れなかった。血の通<sup>かよ</sup>っている身体でありながら、まるで鉈<sup>こうせき</sup>石で作った身体をもっているような気がして来た。なにが物足りないのだ。なにが淋しいのだ。

「そうだ、妻<sup>さいくん</sup>君を貰おう！」

彼は、このスウィート・ホームに欠けている第一番のものに、よくも今まで気がつかなかったものだと感じたくらいだった。

目賀野千吉は、彼の決心を早速会主に伝達した。

「ああ、お嫁さんなの……」

と会主は大きく肯うなずいてみせた。

「いいのがあるワ。あたしの遠縁とおえんの娘こだけれど。丸まるぼちやで、

色が白くつて、そりや綺麗な子よ」

「へえ！ それを僕にくれますか」

「まあ、くれるなんて。貰もらっていたくんだわ。ほほほほ」

と会主は吃驚びっくりするような大きな顔で笑った。

そんなわけで、彼は間もなく、新邸しんていの中にまたもう一つ新し

く素晴らしいものを加えた。それは生々なまなましい新妻にいづまであることは云うまでもあるまい。

新世帯というのを持ったものは誰でも覚えがあるように、三ヶ月というものは夢のように過ぎた。妻君は一向子供を生みそうもなかつた代りに、ますます美しくなつていった。やがて一年の歳月が流れた。その間、かん彼はあらゆる角度から、妻君という女を味わつてしまった。そのあとに來たものは、かねてとな唱えられているちつそく窒息けんたいしそうな倦怠こくしだつた。彼の過去の精神酷使が、倦怠期を迎えるに至る期限をたいへん縮めたことは無論である。彼はひたすら、刺戟しげきに乾いた。なにか、彼を昂奮させてくれるものはないか。彼は妻君が寢台の上に睡つてしまつた後も、一人で安樂椅子あんらくいす

によりながら、考えこんだ。白い天井を見上げると、黒い蠅が一匹、絵に書いたように止まっていた。それをボンヤリ眺ながめているうちに、彼は思いがけないことに気がついた。

「あの蠅というやつは、もう先せんにも、あすこに止まっていたではないか。それが今なほも尚、あすこに止まっている。あれは、先の蠅と同じ蠅かしら。違ちがうかしら。もし同じ蠅だしたら生きているのか死んでいるのか」

彼は不ふ図とそんなことを思った。しかしそれだけでは、一向彼を昂奮こうふんに導くには足たりなかつた。

「なにものか、自分を昂奮こうふんさせてくれるものよ、出て来い！」

彼はなおも執拗しつように、心の中で叫んだ。

「そうだ。あれしかない。古い手だが、暫く見ない。あれをまたすこし見れば、なんとかすこしは刺戟があるだろう」

彼は昔の秘密の映画観賞会のことを思い出したのだった。

(三ヶ月ぶりだ。……)

そう思いながら、彼は或るブローカーから切符を買うと、秘密の映画観賞会のある会合へ、こつそりと忍びこんだ。会主にも表向き会わないで、昂奮だけをソツと一人で持つてかえりたいと思つたからである。

映画はスクリーンの上に、羞らいを捨てて、妖あやしく躍りだした。大勢の会員たちが自然に発する気味のわるい満まん悦えつの聲が、ひどく耳ざわりだった。しかし間もなく、心臓をギュツと握られたと

きの駭おどろきに譬たとえたいものが彼を待っていていようななどは、気がつか  
なかつた。ああ、突然の駭おどろき。それはどこからうつしたものか、  
彼と妻君との戯たわむれが長ちようじやくもの尺物ぶちものになつて、スクリーンの上にな  
つし出されたではないか！

「呀あッ。——」

と彼は一言ひとこと叫んだなりに、呆然ぼうぜんとしてしまった。

(何故なにがだろう。何故なにがだろう)

彼は憤いきどおるよりも前に、まず駭おどろき、羞はじらい、懼おそれ、転がるように  
会場から脱ぬけ出いでた。そして自分の部屋に帰つて来て、安樂椅子  
の上に身を抛なげだした。そしてやつとすこし気を取り直したのだ  
つた。

（何故だろう。あの怪映画は、自分たちの楽しい遊戯を上の方から見下ろすように撮つてあつた。一体どこから撮つたものだろう。撮るといつて、どこからも撮れるようなものはないのに……）

と、彼はいぶかしげに、頭の上を見上げた。そこには、依然として真新しい白壁の天井があるつきりだつた。別にどこという窓も明いている風に見えなかつた。ただ一つ、気になるといへば気になるのは、前から相も変らず、同じ場所にポツンと止まつている黒い大きい蠅が一匹であつた。

「どうしてもあの蠅だ。なぜあの蠅だか知らないが、あれより外ほかに怪しい材料が見当らないのだ！」

そう叫んだ彼は、セオリーを超ちようえつ越つして、梯子はしごを持ってきた。



それから危い腰付でそれに上ると、天井へ手を伸ばした。蠅は何の苦もなくたちまち彼の指先に、捕えられた。しかしなんだか手触りがガサガサであつて、生きている蠅のようではなかつた。

「おや。——」

彼は掌てのひらの上に蠅を転がして、仔細しさいに看みた。ああ、なんとということであろう。それは本当の蠅ではなかつた。薄い黒紗こくしやで作つた作り物の蠅だつた。天井にへばりついていたために、下からは本当の蠅としか見えなかつたのだ。だが誰が天井にへばりついている一匹の蠅を、真物ほんものか偽物にせものかと疑うものがあるうか。

（誰が、なんの目的で、こんな偽蠅にせばえを天井に止まらせていつたのだろう！）

彼は再び天井を仰いでみた。

「おや、まだ変なものがある！」

よく見ると、それは蠅の止まっていたと同じ場所に明いている小さな孔あなだった。どうして孔が明いているのだろう！

その瞬間、彼はハツと気がついた。

「畜生！」

そう叫ぶと彼は、押入の扉ドアを荒々しく左右に開いた。そして天井裏へ潜りこんだ。そこで彼は不可解だった謎をとくことが出来た。あの孔の奥には、巧妙な映画の撮影機が隠されていた。目賀野千吉と新夫人との生活はあの孔あなからすっかり撮影され、彼が入った秘密映画会に映写されていたのであった。会主が家にくれた

のも、その映画をうつさんがために外ほかならなかった。なんと  
なれば、およそ彼ほどの好き者は、会主の知っている範囲では見当ら  
なかつたのだ。会主は彼が本気で実演してくれれば、どんなにか  
会員を喜ばせる映画が出来るか、それを知っていたのだ。むろん  
彼女は、新宅の建築費の十倍に近い金を既にあの映画によつて儲もう  
けていたのだった。

蠅やは？　蠅は単に小さい孔を隠たてす楯すにすぎなかつた。薄い黒こくし  
紗やで出来ている蠅の身体はよく透すけて見えるので、撮影に当つ  
てレンズの能力を大して損そこなうものではなかつたのである。

## 第四話 宇宙線

宇宙線という恐ろしい放射線が発見されてから、まだいくばくも経<sup>た</sup>ないが、人間は恐ろしい生物だ、はや人<sup>じん</sup>造<sup>ぞう</sup>宇宙線というものを作ることに成功した。あのX光線でさえ一ミリの鉛<sup>えん</sup>板<sup>ばん</sup>を貫<sup>つらぬ</sup>きかねるのに、人造宇宙線は三十センチの鉛板も楽に貫く。だから鉄の扉<sup>ドア</sup>やコンクリートの厚い壁を貫くことなんか何でもない。人間の身体なんかお茶の子サイサイである。

どこから飛んでくるか判らない宇宙線は、その強烈な力を発揮して、人間の知らぬ大昔から、人体を絶え間なくプスリプスリと

刺し貫いているのだ。或るものは、心臓の真中を刺し貫いてゆく。また或るものは卵巢らんそうの中を刺し透し、或るものはまた、せいちゆ精せい虫ちゆうの頭を掠かすめてゆく。こう言っている間も、私たちの全身は夥おびただしい宇宙線でもってプスリプスリと縫われているのだ。

一体、そんなにプスリと縫われていて差さしつか支えないものか。差支えないとは云えない、たとえば、精虫が卵子といま結合しようというときに、突然数万の宇宙線に刺し透とおされたとしたらどうであろう。お盆ぼんのように丸くなるべきだった顔が、俄然がぜん馬のように長い顔に歪ゆがめられはしまいか。

私はこの頃人造宇宙線の実験に没頭ぼつとうしているが、いつもこの種の不安を忘れかねている次第しだいである。人造が出来るようになって

てからは宇宙線の流れる数は急激に増加した。ことに私どもの研究室の中では、宇宙線が霞かすみのように柵曳たなびいている。恐らく街頭で検出できる宇宙線の何百倍何千倍に達していることだろうと思う。私はこうして実験を続けていながらも、何か駭おどろくべき異変がこの室内に現われはしまいかと思つて、ときどき背中から水を浴びせられたように感ずるのだ。そんなことが度たび重かさなつたせいか、今日などは朝からなんだか胸がムカムカしてたまらないのである。

読者は、私が科学者である癖くせに、何の術じゆつ策さくを施ほどこすこともなく、ただ意味なく狼ろう狽ばいと恐怖おそとに襲おそわれているように思うであろうが、私とても科学者である。愚おろかしき狼狽ろうばいのみに止とどまつてい

るわけではない。すなわち、ここにある硝子ガラスびん壺つぼの中をちよつと

覗<sup>のぞ</sup>いてみるがいい。この中に入っているものは何であるか御存知であろう。これは蠅である。

この蠅は、最初壇に入れたときは二匹であつたが、特別の装置に入れて置くために、だんだん子を孵<sup>かえ</sup>して、いまではこのとおり二十四五匹にも達している。この蠅の一群を、私は毎日毎日、丹念に調べているのだ。しかし私はいつも失望と安堵<sup>あんど</sup>とを迎えるのが例だつた。なぜならば、蠅どもは別に一向異変をあらわさなかつたから……。

だが、今日という今日は、待ちに待った戦<sup>せんりつ</sup>慄に迎えられたのだ。それは、この壇の中に一匹の怪しい子蠅を発見したからである。その子蠅は、なんとという恐ろしい恰好をしていたことである。

うか。それははじめは気がつかなかったが、すこし丈夫になって、壇の上の方に匍はいあがってきたところを見付けたのであるが、一つの胴体に、二つの頭をもっていたのだ！ 言わば双つ頭の蠅である。こんな不思議な蠅が、いまだかつて私共の目に止まったことがあろうか。いやいやそんな怪しげなものを見たことがなかった。おそらく、どこの国の標本室へいつても、二つ頭の蠅などは発見されないであろう。ことに目の前に蠅の入った壇を置いてあって、その中にこのような怪しい畸形の子蠅を発見出来るなどいうことは、著いちじるしい特別の原因がなくては起り得るものではない。

——その原因を、わが研究室の宇宙線に帰きすることは、極きわめて自然であると思う。無論読者においても賛成せられることであらう。



……

\*

——さて、前段の文章は、途中で切れてしまったが、まったく申訳がない。実は急に胸むなもと元もとが悪くなって、嘔吐おうとを催もよおしたのだ。そして軽い脳貧血にさえ襲われた。私は皆の薦すすめで室を後にし、別室のベッドに寝ていたのだ。それからかれこれ三時間は経った。やっと気分もすこし直つて来たので、起き上ろうかと思つていと、其所そこへ友人が呼んでくれた医師が診察に来てくれた。その診察の結果をこれからお話しようと思うのであるが、読者は信じてくれるかどうか。多分信じて貰えまいと思う。といつてこれが話さずにいられようか。

いま私は起き上つて、蠅の入つた壘を手にとつて見ている。あれから三四時間のちのことであるが、二つ頭の蠅が、俄然がぜん五匹に殖えている。異変は続々と起つているのだ。そして生物学的にみて、何というはんしよく繁殖すさまの凄じさであろうか。何という怪奇な新生児であろうか。

私がおもひ生物学者であつたとしたら、蠅が卵を生み始めた頃直ぐに、重大なる事柄に気がつかねばならなかつたのである。随したがつて、近頃の私自身の気分が悪さについても、早速さつそく思ひあたらねばならなかつたのであるが、幸か不幸か、私には蠅の雌雄しゆうを識しきべ別べつする知識がなかつたのである。

実は私は——理学博士加宮久夫かのみやひさおは、本日医師の診察をうけた

ところによると、奇怪にも妊娠しているというのである。男性が妊娠する——なんて、誰も本当にしないであろうが、これは偽りいつわのない事実である。ああなんとという忌いまわしき、また恐ろしいことではないか。男性にして妊娠したというのは、私が最初だったであろう。なぜ妊娠したか。その答えは簡単である。——この研究室に柵たなびいている宇宙線が私の生理状態を変えてしまつて、そして妊娠という現象が男性の上に来たのだ。

私が生物学者だったら、この壇の中の蠅が卵を生んでいるときに、既に怪異に気がつくべきだった。何となれば、その卵を生んでいる蠅は、いずれも皆雌めすではなく、実に雄おすだったのである。そしてその雄から、あの畸形な子蠅が生れてきたのだ。

ああ、私は果して、五体が満足に揃った嬰兒えいじを生むであらうか。それとも……。

## 第五話 ロボット蠅

赤軍の陣営では、軍団ぐんだんちよう長イワノウイツチが本営から帰つてくると、司令部の広間へ、急遽きゆうきよ幕僚ばくりようの参集さんしゅうを命じた。「実に容易ならぬ密報をうけたのじゃ」と軍団長は青白い面に深い心痛しんつうの溝みぞを彫ほりこんで一同を見廻した。「白軍には駭おどろくべき

多数の新兵器が配布されているそう。その新兵器は、いかなる種類のものか、ハッキリしないのであるが、中に一つ探りあてたのは、殺人音波さつじんおんぱに関するものだ。耳に聞えない音——その音が、一瞬間に人間の生命を断つてしまうという。とにかく一同は、この新兵器の潜せん入にゅうについて、極きよくど度の注意を払って貰わにやならぬ。そして一台でも早く見つけたが勝じや。一瞬間発見が早ければ千人の兵員を救う。一秒間発見が遅ければ、千人の兵員を喪うしなう。各自は注意を払って、新兵器の潜入を発見せねばならぬ」

並居なみいる幕僚は、思わずハツと顔色を変えた。そして銘めい々めいに眼まなこをギョロつかせて、室内を見廻した。もしやそこに、見馴みなれない新兵器がいつの間にもやら搬はこびこまれてはいはしまいかと思つて……。

「ややッ、ここに變なものがあるぞ」

幕僚の一人、マレウスキー中尉が突然叫んだ。

「ナナなんだって？」

一同は長靴をガタガタ床にぶつつけながら中尉の方を見た。彼は室の隅すみの卓テーブル子の上に、手のついた真黒い四角な箱を発見したのだ。

「こッこれだッ。怪しいのは……」

「なんだ其の箱は」

「爆弾が仕掛けてあるのじゃないかナ」

「イヤ短波の機械で、われ等の喋しゃべっていることが、そいつをとおして、真直まっすぐに敵の本營へ聞えているのじゃないか」

「それとも、殺人音波が出てくる仕掛けがあるのじゃないか」

一同は喚わめきあつて、その四角の黒くろ函ばこをグルリと取り巻いた。

「あツはツはツ」と人垣のうしろの方から、無遠慮ぶえんりよな爆笑の聲がひびいた。フョードル参謀の声で。

「あツはツはツ。それア弁当屋べんとうやの出前持でまえもちの函なんだ。多分お昼に食おれった俺の皿が入っているだろう」

「なんだって、弁当の空からか？」

「どうして、それがこんなところにあるのか」

「イヤ、さつき弁当屋の小僧が来た筈なんだが、持ってゆくのを忘れたのじゃあるまいかのウ」フョードル参謀は云った。

「忘れてゆくとは可笑おかしい、中を検しらべてみる」

「早くやれ、早くやれッ」

「よオし」とフョードル参謀は進み出た、「じや明けるぞオ<sup>あ</sup>」

一同の顔はサツと緊張した。軍団長イワノウイツチは、大<sup>だい</sup>刀<sup>とう</sup>を立<sup>た</sup>て反<sup>そ</sup>身<sup>り</sup>になつて、この際<sup>た</sup>の威<sup>い</sup>厳<sup>げん</sup>を保<sup>た</sup>もとうと努力した。

「よオし、明けるッ」

「明けるぞオ」

フョードルは、黒<sup>くろ</sup>函<sup>ぼこ</sup>の蓋に手をかけると、音のせぬようにソツと外<sup>はず</sup>しにかかった。一同の心臓は大きく鼓動をうって、停りそ<sup>う</sup>になつた。

「……?」

蓋はパクリと外れた。



「なアんだ」

見ると、函の中には、白い料理の皿が二三枚重かさなっているばかりだった。皿の上には食いのこされた豚の脂あぶらにく肉が散らばっていて、蠅が二匹、じつと止とまっていた。

「ぶーツ。ずいぶん汚い」

「見ないがよかった。新兵器だなんていうものだから、つい見ちまった」

一同は興きようざめ顔のうちに、まアよかったという安堵あんどの色を浮べた。

そのとき入口の扉ドアが開いて、少年がズカズカと入ってきた。

「おや、貴様は何者かッ」

「誰の許しを得て入って来たか」

将校たちに詰めよられた少年は、眼をグルグル廻すばかりで、  
頓とみに返辞も出せなかつた。

「オイ、許してやれよ」フョードル参謀が声をかけた、  
「いくらはくぐん白軍の新兵器が恐ろしいといったって、あまり狼ろうばい狽さいしすぎる  
のはよくない……」

「なにッ」

「そりや、弁当屋の小僧だよ」

「弁当屋の小僧にしても……」

「オイ小僧、ブローニングで脅おどかされないうちに、早く帰れよ」

少年はフョードルの言葉が呑みこめたものか、肯うなずいて黒い函を

とると、重そうに手に下げ、パツと室外に走り出した。

「なーんだ、本当の弁当屋の小僧か」

「いや小僧に化けて、白軍の密偵が潜入して来るかも知れないのだ」とマレウスキー中尉は神経を尖とがらした。

「油断はせぬのがよい。しかし卑怯ひきようであつては、戦争は負けじや」

と一伍いちぶしじゆう一什いっじつを見ていた軍団長はうまいことを述のべて、大きな椅子のうちに始めて腰を下ろした。

「注意をすることが、卑怯であるとは思ひませぬ」とマレウスキー中尉は引込んでいかなかった。「怪しいことがあれば、そいつは何処までも注意しなきやいけません。たとえば……」

「たとえば何だという？」とフォードルが憎々しげに中尉を睨みつけた。

「たとえば、ああ、そこをごらん下さい。一匹の蠅が壁の上に止まっている。そいつを怪しいことはないかどうかと一応疑ってみるのがわれわれの任務ではないか」

「蠅が一匹、壁に止まっているって？ フン、あれは……あれは先刻弁当屋の小僧が持つて来た弁当の函から逃げた蠅一匹じゃないか。すこしも怪しくない」

「それだけのことでは、怪しくないという証明にはならない。それは蠅がああ黒い函の中から逃げだせるという可能性について論及したに過ぎない。あの蠅を捕獲して、六本の脚と一個の口

うふん  
物とに異物が附着しているかいないかを、顕微鏡の下に調べる。もし何物か附着していることを発見したらば、それを化学分析する。その結果があゝの黒函の中の内容である豚料理の一部分であらばいいけれど、それが違っているか、或いは全然附着物が無いときには、どういうことになるか。あゝの蠅は弁当屋の出前の函にいたものではないという証明ができる。さアそうなれば、あゝの蠅は一体どこからやって来たのだろうか。もしやそれは一種の新兵器ではないかと……」

「あツはツはツはツ」と参謀フォードルは腹を抱えて笑い出した。「君の説はよく解つた。そういう種類の説は昔から非常に簡単な名称が与えられているのだ。曰く、懷疑主義とネ」

「イヤ参謀、それは粗笨そほんな考え方だと思う。一体この室に蠅などが止まっているというのが極きわめて不思議なことではないか。ここは軍団長の居らるる室だ。ことに季節は秋だ。蠅がいるなんて、わが国では珍らしい現象だ」

「弁当屋が持つて来たのなら、怪しくはあるまいが……」

「ことに新兵器なるものは、敵がまつたく思いもかけなかつたよ  
うな性能と怪奇な外観をもつのを佳よしとする。もし蠅の形に似せた  
新兵器があつたとしたら……。そしてあの弁当屋の小僧が実は白  
軍のス。パイだったとしたら……」

「君は神経衰弱だツ」。

「参謀は神経が鈍にぶすぎるツ」

「いや、君は……」

「鈍物参謀どんぶつさんぼう」

「やめいッ！」

と軍団長が大喝たいかつした。

「はッ」と二人は直立不動の姿勢をとった。

「もうやめいッ、論議は無駄だ。喋いっている違いとまがあつたら、なぜ

あの蠅を手にとって検しらべんのじゃ」

「はッ」

二人は顔を見合わせた。誰が蠅を検べにゆくのがよいか——と考とえた。その途端とたんに、フョードルも、中尉もハツと顔色をかえて、胸をおさえた。軍団長もヨロヨロとよろめきながら、右手で心臓

をおさ压えた。そればかりではない。司令部広間にいた幕僚も通信手も伝令も、皆が胸を压えた。そして次の瞬間には立てて並べてあつた本がバタリバタリと倒れるように、一同はつぎつぎに床の上に昏倒こんとうした。間もなく、この大広間は、世界の終りが来たかのように、一人のこらず死に絶えた。まことに急激な、そして不可解な死に様ようだった。

たつた一つ、依然として活躍しているものがあつた。それは壁にとまつていた一匹の蠅だった。その蠅の小さい一翅いっしは、どうしたものか、まったく眼に見えなかった。それは翅が無いのではなく、翅が非常に速い振動をしていたからである。その翅の特異な振動から、殺人音波が室内にふりまかれているのであつた。白軍



の新兵器、殺人音波は、実にこの蠅から放射されていたのである。

蠅は死にそうदैいて、中々元氣であつた。人間が死んで、蠅が死なないのはおかしいが、もし手にとつて、顕微鏡を持つまでもなく肉眼でよく見るならば、この蠅が唯ただの蠅ではなく、ロボット蠅ばえであることを発見したであろう。

この精巧なロボット蠅は、弁当屋の小僧が持つて来て、壁にとりつけていったものだった。蠅が止まっていると格別氣にもしなかつた間にあの小僧に化けたスパイは遠くに逃げ失せた。その頃、一つの電波が白軍の陣營から送られ、それであのロボット蠅の翅たちまは忽ち振動を始めたのだ。その翅からは戦せんりつ慄すべき殺人音波が発射され、室内の一同を塵みなごろ殺しというわけだった。軍団長のい

うとおり、もつと早く蠅を手にとつて調べていたら、こんな悲惨な結果にはならなかつたろう。

ロボツト蠅は、それから後も、続々ぞくぞくと偉功いこうを樹たてた。

## 第六話 雨の日の蠅

(妻が失踪しつそうしてから、もう七日になる)

彼は相変あいかわらず無気力な瞳を壁の方に向けて、待つべからざるものを待つていた。腹は減つたというよりも、もう減りすぎてし

まった感じである。胃袋は梅干大うめほしだいに縮小していることであろう。妻を探しにゆくなんて、彼には、やりとげられることではなかった。外はどこまでも続いた密林、また密林である。人間といえど彼と妻ときりしか住んでいない。食いつめて、虐しいたげられて、ねじけきつて辿たどりついたこの密林の中の荒れ果てた一軒家だった。主人のない家とみて今日まで寝泊りしているのだった。

失踪した妻を探しにゆく気力もなかった。それほど大事な妻でもなかった。結局一人になった方が倅しあわせかもしれない。しかし、倅なんておよそおかしなものである。腹の減ったときに蜃しんきろう気楼を見るようなもので、なんの足しになるものかと思った。

陽がうつすらとさしていたのが、いつの間にやら、だんだんと

吸いとられるように消えていった。そしてポツポツ雨が降ってきた。密林の雨は騒々そうぞうしい。木の葉がパリパリと鳴った。

丸太ン棒を輪切りにして、その上に板をうちつけた腰掛の下から、一陣の風がサツと吹きだした。床に大きな窓が明いているのであった。とたんにどツと降りだした篠しのをつくような雨は、風のために横なぐりに落ちて、窓まど枠わくをピシリピシリと叩いた。密林がこの小屋もろとも、ジリジリと流れ出すのではないかと思われた。

流れ出してもよい。すべて天意のままにと彼は思った。

雨は、ひとしきり降ると、やがて見る見る勢いきおいを失っていった。

そしてあたりはだんだん明るさが恢かい復ふくしていった。風もどこか

へ行つてしまつた。

やがてまたホンノリと、薄陽うすびがさしてきた。彼はまだ身体一つ動かさず、破れた壁を見詰みつめていた。雨が上あがつたら、どこからか妻がキイキイ声をあげながら、小屋へ駈かけこんでくるように感じられた。だがそれは、いつもの期待と同じように、ガラガラと崩くずれ落ちていった。いつまでたつてもキイキイ声はしなかつた。

壁を見詰めている彼の瞳の中に、なんだかこう新しい気きりよく力が浮んできたように見えた。壁に、どうしたものかたくさんの蠅はが止まっている。一匹、二匹、三匹と数えていつて、十匹まで数えたが、それからあとは嫌いやになつた。十匹以上、まだワンワンと居た。

(どうして蠅が、こう沢山居るのだろうか)

彼はようやく一つの手頃な問題にとりついたような気がした。別に解とけなくともよい。気に入る間だけ、舌の上に載のせた飴あめ玉だまのように、あっちへ転がし、こっちへ転がしていればいいのだ。さて、蠅がどうしてこんななに止まっているのか。

(ウン、そうだ……)

そうだ。蠅はさつきまで一匹も壁の上に止まっていたように思われない。蠅が急に壁の上に殖ふえたのは、先刻さつきの豪雨ごううがあつてから、こつちのことだ。

(そうだ。雨が降つて、それで蠅が殖えたのだ。どうして殖えたのだ?)

窓には硝子板ガラスいたなんてものが一枚も入っていなかった。板で作った戸はあつたけれど、閉めてなかった。この窓から、あの蠅が飛びこんできたのに違いない。しかし飛びこんでくるとしても、この夥おびただしい一群の蠅が押しよせるなんて、彼がこの小屋に住むようになつた一年この方、いままでに無いことだつた。

(なぜ、今日に限つて、この夥しい蠅の一群が飛びこんで来たのだ。どこから、この夥しい蠅が来たのだ)

彼の眼は次第に険けんあく悪の色を濃くしていった。

どこから来たのだ、この夥しい蠅群は！

「ああッ。——」

と彼は叫んだ。

「この蠅が来るためには、この家の外に、なにか蠅が沢山たかっている物体があるのだ。雨が降って——そして蠅が叩かれ、あわててこの窓から飛びこんできたのだ。そうだそうだ、それで謎は解ける！」

彼は爛々たる眼で見入った。

(だが、その蠅の夥しくたかっている物体というのは、一体なものだったろう)

彼は急に落着かぬ様子になって、ブルブルと身体を慄わした。両眼はカツと開き、われとわが頭のあたりにワナワナとふるえる両手を擱みつけた。

「ああッ。——ああッ、あれだッ。あれだッ」



彼は腰掛から急に立ち上った。釘くぎをうったように棒立ちになった。ひどい瘰癧けいれんが、彼の頬に匍はいのぼった。

「妻だ。妻の死体だッ」彼の声は醜みにくく皺しわ枯がれていた。「妻の死体が、すぐそこの窓の下に埋うまっているのだ。それがもう腐って、ドンドン崩れて、その上に蠅はがいつぱいたかっているのだ。……先刻の雨に叩かれて、そこにいる蠅の一群が、窓から逃げこんできたのだ。ああ、妻の死体を嘗なめた蠅が、そこの壁の上に止まっている！」

彼は後退あとがりをすると、背中を壁にドスンとぶつけた。

「……で、その妻は、一体誰が殺し、誰がそこに埋めたのだろうか」

彼は土の下で腐乱ふらんしきつた妻の死体を想像した。いまの雨に、その半身はんしんが流れ出されて、土の上に出ているかもしれないと思つた。

「殺したのは誰だ。この無人境むじんきょうで、妻を殺したのは誰だッ」  
そのとき、入口の扉ドアがコツコツと鳴つた。誰かがノックをして  
いるのだ。

「あワワ……」

彼は身を翻ひるがえすと、部屋の隅に小さくなつた。まるで蜘蛛くもの子が逃げこんだように。

コツ、コツ、コツ。

又もや気味の悪い叩音ノックが聞える。

彼は死んだようになって、息をこころした。

そのとき扉の外で、ガチャリと音がした。鍵の外れるような音であつた。そしてイキナリ、重い扉が外に開いた。その外には詰つ襟めえりの制服に厳いかめしい制帽を被つた巨大漢きよだいかんと、もう一人背広を着た雑誌記者らしいのが肩を並べて立っていた。

「これがその男です」と、制服の監視人が部屋の中の彼を指して云つた。「妻を殺して、窓の外にその死体を埋めてあるように思つている患者です。この男は何でも前は探偵小説家だつたそうで、窓から蠅が入つてくると、それから筋を考えるように次から次へと、先を考えてゆくのです。そして最後に、自分が夢遊病むゆうびょうしや者であつて、妻を殺してしまつたというところまで考えると、それ

で一段落いちだんらくになるのです。そのときは、いかにも小説の筋が出来たというように、大はしやぎに跳はねまわるのです。……強暴性の精神病患者ですから、この部屋はこれまでに……」

## 第七話 蠅に喰われる

机の上の、小さな蒸発じょうはつぎょう皿の上に、親子の蠅が止まっている。まるで死んだようになって、動かない。この二匹の親子の蠅は、私の垂たらしてやった僅わずかばかりの蜂蜜に、じつと取付いて離れな

くなっているのだ。

そこで私は、戸棚の中から、二本の小さい壺をとりだした。一方には赤いレツテルが貼つてあり、もう一つには青いレツテルが貼つてあつた。この壺の中には、極めて貴重な秘薬ひやくが入っているのだつた。赤レツテルの方には生長液せいちようえきが入つて居り、青レツテルの方には「縮小液しゆくしようえき」が入つていた。これは或るところから手に入れた強烈な新薬である。私はこの秘薬をつかつて、これからちよつとした実験をして見ようと思つているのだ。

私は赤レツテルの壺の栓を抜くと、妻楊子つまようじの先をソツと差し入れた。しばらくして出してみると、その楊子の尖端せんたんに、なんだか赤い液体が玉のようについていた。それが生長液の一滴いってきな

のであった。

私はその妻楊子の尖端を、蒸発皿の方へ動かした。そして親おやば蠅えがとりついている蜂蜜の上に、生長液をポトンと垂たらした。

それから息を殺して、私は親蠅の姿を見守った。

ブルブルブルと、蠅は翅はねをゆり動かした。

「うふーん」

と私は溜息をついた。蠅はしきりに腹のあたりを波うたせている。不図ふと隣りの仔蠅の方に眼をうつした私は、ドンと胸をつかれたように思った。

「呀あツ。大きくなっている！」

仔蠅の身体に較べて、親蠅はもう七八倍の大きさになっている

のだ。そして尚なおもしきりに膨ふくれてゆくようであった。

「ほほう。蠅が生長してゆくぞ。なんとという素晴らしい薬ききめの効目だ」

蠅は薬がだんだん利いて来たのであろうか。見る見る大きくなっていった。三十秒後には懐中時計ほどの大きさになった。それから更に三十秒のちには、亀かめの子束子こたわしほどに膨ふくれた。私はすこし気味が悪くなった。

それでも蠅の生長は停まらなかつた。亀の子束子ほどの蠅が、草履ぞうりほどの大きさになり、やがてラグビーのフットポールほどの大きさになった。電球ぐらいもある両りょう眼がんはギラギラと輝き、おそろしい羽ばたきの音が、私の頬を強く打った。それでもまだ

蠅はグングンと大きくなる。こんなになると、蠅の生長してゆくのがハッキリ目に見えた。私はすっかり恐ろしくなった。

蠅の身体が、やがて驚ぐらしいの大ききになるのは、間のないことであろうと思われた。

(これはもう猶予すべきときではない。早く叩き殺さねば危い!)  
なにか適當の武器もがなと思つた私は、慌てて身边をふりかえつたが、そこにはバット一本転がっていなかつた。友人のところへ猟銃を借りにゆく手はあるんだが、既にもう間に合わなかつた。そんなに愚図愚図手間どっていると、この蠅は象のように大きくなつてしまうことだろう。

狼狽と後悔との二重苦のうちに、私は不図一つの策略を思



いついた。それはすこし無鉄砲なことではあったが、この上は躊躇ゆうちよ

躊躇ゆうちよしている場合ではない。——と咄嗟とつさに腹を極きめた私は、赤

いレットルの生長液の入った壇をとりあげて栓を抜くと、グツと一ひと息いきに生長液を嘔のんだのであった。

たちまち身体の中は、アルコールを炊たいたような温かさを感じた。と思ったら私の身体はもうブツブツ膨ふくれはじめた。シャボン玉のように面白いほど膨らみ始めた。

あの親蠅はと見ると、先程に比べてなるほど小さく見えだした。これは私の身体が大きくなったのでそう見えるのであろう。室内の調度に比べると、彼かの蠅は土佐犬とさいぬほどの大きさになっているらしかつた。大量の生長液を飲んだせいで私は尚なもグングン大きく

なつていった。そのうちに親蠅は私の両手でがっちりつかめそうになった。

「よオし、こいつが……」

私はたちまち躍りかかると、親蠅の咽喉のどを締めつけた。蠅は大きな眼玉をグルグルさせ、口こうふん吻からベトベトした粘液ねんえきを垂らすと、遂ついにあえなくも、呼吸が絶たえはてた。そしてゴロリと上向うわむきになると、ビクビクと宙に藻掻もがいていた六本の脚が、パンタグラフのような恰好かっこうになったまま動かなくなってしまった。私はほっと溜息をついた。

そのときだった。私は頭をコツンとぶつけた。見ると私の頭は天井にぶつかったのであった。何しろグングン大きくなってゆく

ので、こんなことになってしまったのだ。私は元々坐っていたのであるが、蠅を殺すときに中腰ちゆうごしになっていた。このままですると、天井を突き破るおそれがあるので、私はハツとして頭を下げて、再びドカリと坐った。

「ああ、危かった」

だが、本当に危いのは、それから先であるということが直ぐ解すわかった。私の身体はドンドン膨ふくれてゆく。このままでは部屋の内に充満するに違いない。外へ出ようと思つたが、そのときに私は恐ろしいことを発見した。

「ああッ、これはいけない！」

私は思わず叫んだ。もうこんなに身体が大きくなつては、窓か

らも扉ドアのある出入口からも外に出られなくなっているのだった。部屋から逃げだせないとしたら、これから先ず一体どうしたらいいのだろう。

恐らく私の身体は壁を外へ押し倒し、この家を壊してしまわないと外へ出られないだろう。だがこの部屋の構造は特別に丈夫に作らせてあるのだ。身体の方が負けてしまうかも知れない。内から生長してゆく恐ろしい力が、巖がんじょう 丈りょうごうな壁や柱に圧された結果はどうなるのだろうか。私の五体は、両りょうごう 国こくの花火のようになって、真紅まっかな血煙とともに爆発しなければならぬ。そのうちに肩のところかメリメリいつて来た。

私は二度の大狼おおろうばいに襲われた。

「これアいかん！」

こうなつては、一秒も争う。私は神を念じ、痛い顎あごの骨を折つて、あたりを見まわした。そのとき天の助けか、目についたのは一個の薬壘たまりだった。青レツテルを貼つた縮小液の入つた壘たまりだった。「そうだ。あれを飲めば、身体が小ちやくなるぞ！」

私は指の尖端さきに唾つばをつけて、その青レツテルの壘たまりをへばりつけた。それから爪の先で、いろいろやつてみてやつと栓せんを抜いた。

「さあ、しめたツ」

私はそのひとたらしもない薬液を、口の中へ滴たらしこんだ。それはたいへん苦にがい薬いだった。

スーツと身に涼りよう風ふうが当るように感じたそのうちに、エレヴ

エーターで下に降りるような気がしてきた。それと共に身体が冷ひえて、ガタガタ慄ふるえだした。しかし、ああ、私の身体はドンドン小さくなつて行く。坐つていて箆たんす箆の上のに首が載のつたのが、今は箆たんすと同じ高さになつた。

ますます縮んでいった。立ち上つても、頭が鴨居かもいの下のに来た。椅子に坐つてみても丁ちようど度腰の下ろし具合がいい。もうこれで元もとのようになつたと感じた。

しかしである。また心配なことが起つて来た。元もとのようになつた身体は、まだグングン小さくなつてゆくのだつた。椅子に腰を下ろして、足の裏がいつの間まにやら、絨じゆうたん毯たんから離れて来た。下へ降りようと思つと、窓から下へ飛び降りるように恐ろし

くなつてきた。私はお人形ほどの大きさになつたのである。

それ位に止まるならば、まだよかつたのであるが、更に更に、身体は小さく縮まつていった。私はキャラメルちぢの箱に蹴つまずいて、向う脛すねをすりむいた。馬鹿馬鹿しいツたらなかつた。そのうちに、私は不思議なものを発見した。それは一匹の豚ぶたほどもある怪物が、私の方をじつと見て、いまにも飛びかかりそうに睨にらんでいるのだ。

「なにものだろう！」

私は首を傾けた。そんな動物がこの部屋に居るとは、一向思つていなかつたのだ。

しかしよく見ると、その怪物は大きな翅はねがあつた。鏡のような

眼があつた。鉄骨のような肢あしがあつて、それに兵士の剣のような鋭い毛がところきらわず生えていた。私はそのときやつとのこと、その怪物の正体に気がついた。

「ああ、こいつは、私の先刻さつき殺した蠅の仔なのだ」

仔蠅にしては、何という大きな巨きよじゆう獣（？）になつたのであろうか。

その恐ろしい仔蠅は、しずしずと私の方に躍にじりよつてきた。眼玉が探照灯たんしょうとうのようにクルクルと廻転した。地鳴りのような怪音が、その翅のあたりから聞えてきた。蓮池はすいけのような口吻こうぶんが、醜くゆがむと共に、異臭のある粘液がタラタラと垂たれた。

「ぎやーツ」



私の頭の上から、そのムカムカする蓮池はすいけが逆さまになって降  
つて来たのだ。私の横腹は、銃剣のような蠅の爪つめでプスリと刺し  
とおされた。

「ぎやーッ。——」

そこで私は何にも判らなくなってしまった。その仔蠅に食われ  
ただけ判っていた。不思議にも、何時いつまでも何時いつまでも記憶  
の中にハッキリ凍りついて残っていた。



# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三二書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「ぷろふいる」

1934（昭和9）年2月号～9月号

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 蠅

海野十三

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>